

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 新田 元規

儒教が理想とする社会秩序は、古代の聖王たちが定めたとされる礼制によって表現されていた。現実社会の変化にともなって礼制との齟齬が生じると、その間を架橋すべく学者たちによって、経学(=経典解釈学)のなかでさまざまな思想的言説が生みだされていく。本論文は「中国近世期における家族礼制の解釈史——清代初期礼学の視座から」と題して、「近世」(本論文では宋～清、西暦10～19世紀を指す)において古代礼制の再構成をはかる解釈学が、同時代の礼制・礼秩序とどのように接点を持ち、その歴史背景とどう関わるかを論じている。

本論文は、序章と本論部分全9章、および結論部とからなっている。序章では、問題の所在として、先行研究の批判的総括を通じて、近世期礼制解釈史の分析が断代的にではなく通時的観点からなされるべきことを述べ、これを本論文の課題として設定する。以下、第一部(第一章)は「清代初期礼学史の背景」を萬斯大・斯同兄弟、徐乾学、毛奇齡の三者それぞれについて説明する。第二部(第二章～第四章)は「士庶身分における家族礼制論の固有性」を3つの論点につき、皇帝の家族礼制論と比較照射しながら説明する。第三部(第五章～第六章)は「古礼解釈とその同時代的規範性」について、士庶身分における傍系相続の正当化理論諸種を紹介批評する。第四部(第七章～第九章)は「古代礼制の解釈における歴史意識と身分的含意」について、清初の論者たちの主張・論点を整理し、毛奇齡と萬斯大を両極とする類型化をおこなって説明する。結論部では、以上の行論にもとづいて、清初経学の位相を近世の事象に対する通時的観点の導入によって定位することが試みられる。

本論文は、先行する諸研究に見られる史料解釈の誤謬や背景となる経学的文脈の見落としを実証的に指摘する箇所が多く、家族礼制に対する経学解釈史として見るべき独創的な成果を挙げている。特に、清代初期の多様な経学説を具体的な課題ごとに分類整理し、緻密な解説を施している点で、後続する研究が必ず参照すべき業績といえよう。その史料博搜と懇切詳細な解説は国際的にも認めうる水準に達していると評することができる。

ただ、その一方で、本論文全体に説明的・解釈的な叙述に終始していて著者の創見が見えにくいことや、所期の課題とした「通時的観点」がまだ必ずしも十分な効果をもたらしていないことなどには改善の余地が残る。

とはいえ、ここまで総合的・体系的に家族礼制に関する清初経学を扱った研究は海外でもまだ書かれておらず、本論文が学術的に相応の水準にあることは積極的に評価できる。よって、審査委員会は博士(文学)の学位を授与するにふさわしいものと判断する。